

この家の記事は、「使用目的を定めない空間を」のタイトルですが、「インナーテラス」のイメージもしています。



上記写真は、雑誌・住まいの設計より

1994年(平成6年)8月6日(土曜日)

住まいの設計

敷地が狭く、両側には隣家が接近していて、屋外に洗濯物を干す場所も、ベランダをつくるスペースも取れない。住宅密集地ではそんな悩みを持っている人は少なくない。そんなときは発想を転換し、室内に「何にでも使える空間」をつくらせてみるべきだろうか。建築家の植木秀規さんは、目的を決めないスペースづくりを提案している。

今年三月末に完成した埼玉をこった。設計段階では、夫婦の寝室、

興誠谷市の会社員飯塚武志さん四七宅の敷地は、東西七・三材、南北十七材という南北に細長い形(百二十四平方メートル)。居住空間をできるだけ確保するため、一、二階とも同じ床面積(五十九平方メートル)で床面積は百十八平方メートル

住まい 家庭とくぐりこ

住宅密集地での敷地の有効利用

母の部屋、中学生の長女、二人の各個室、居間、応接室、食事室などの各部屋を、二階中央部に、だんに取り入れるため、この部屋だけ屋根を突き出し、天井を高くした(最高四材、ほかの部屋は二材二〇)。また、突き出した屋根に天窓をつくった。ところが、天窓をつくったばかり、サッシのある西側は最も高い部分まで、すべてガラス張りにした。

使用目的定めない空間を

「天井はガラス張り、床はコンクリート」など



飯塚さん宅の目的を定めない自由なスペース。この部分だけ天井を高くし、床の一部をコンクリートにした

の住まいに飾っておいた観葉植物の鉢植えを並べる場所がないことに気づいた。隣家との敷地が迫っているため、十分なベランダをつくることもできなかった。

そこで植木さんが提案したのが二階中央部にある板張り六畳の食事室を改造した。使用目的を絞り込まない部屋づくり。居間や食事室などと、性格を決めないスペースだ。

床も全面板張りだったのをやめて、サッシ側を八十センチでコンクリート床にした。

モノに魂が宿っていると、いうイメージ、そしてモノを処分するときの心の痛みは、昔の人たちには、相当強烈にあったらしい。数年前、京都国立博物館の検査を集めた特別展覧会で、さまざまな道具のお化けが行列を歩いている室町時代の不思議な絵に出会って、そう

植木さんは「限られた敷地で家を建てなければならない」とも活用できる。

TSS東京ガス新宿ショールームで開かれる。ライトは、機能性や合理性

この結果、二階中央部に、天井から光が差込む広々としたスペースができた。コンクリート床の部分は、さすがに室内ベランダ。ここなら物干し台を移動したりしても床が傷つく心配はない。観葉植物への光も十分に取れる。もちろんテーブルを持ち込めば食事室に早変わり。

妻の敏子さん(四六)は「物置代わりにビルゲイスなどを置いて、天井が高いので自然とした印象を受けないです」と話す。アロンかけをしたたり、子供たちが工作をしたりますと、きにも活用できる。

生活の豊かさを追求し続け、アメリカの建築家、フランク・ロイド・ライト(一八六七-一九五九)の主張を現代に問い直そうという講演会が、来月三日、東京・新宿のTSS東京ガス新宿ショールームで開かれる。

三月三日、東京で講演会

モノのお化け 「心の痛み」なく捨てること……



怪(よみか)にならぬ、徘徊(はぐりか)して、間にいらぬあなをなす、いつ「付喪神(つくもがみ)」を表したものだ、とまわっている。